



# ヨコハマトリエンナーレ2011

## YOKOHAMA TRIENNALE 2011

---

記者会見資料

2011年3月11日

横浜トリエンナーレ組織委員会

ヨコハマトリエンナーレ 2011のテーマと参加作家を発表できることを、心より光栄に思います。

横浜市は文化芸術創造都市「クリエイティブシティ」として、先進的なまちづくりに取り組んでおり、創造界隈拠点を中心としてアーティスト、クリエイターが横浜に集まり、多様な活動が展開されています。市民の方々にもまた、現代アートをはじめ多様なジャンルの文化芸術に親しんで、その活動を支えていただいています。

第4回展となる今回は、2001年の第1回から10年という節目を迎え、これまで蓄積してきた横浜の経験・人材・ネットワーク等を活かし、わが国を代表する現代アートの国際展でありながら、横浜らしい特色をもつ展覧会を実現したいと考えています。横浜ならではの創造界隈拠点等との連携、まちへの展開により、現代アートのファンはもちろん、子どもや家族連れをはじめとする市民の方々にも楽しんでいただくことを目指しています。

開催に向けて多くの方々にご尽力をいただいていることに深く感謝を申し上げますとともに、引き続きのご支援をお願いいたします。そして、ヨコハマトリエンナーレ 2011に是非ご期待ください。

横浜トリエンナーレ組織委員会会長  
横浜市長  
林 文子



8月6日に開幕する横浜トリエンナーレは、今年で4回目を迎え、運営の主軸が横浜に移るとともに横浜美術館が主会場のひとつになるなど、過去3回とは異なり、より横浜からの発信に力点が置かれる体制となりました。本展では、ヨコハマトリエンナーレ2011と柔らかいカタカナ表記とし、親しみやすさを考慮しました。

昨年10月のキック・オフ以来、三木あき子アーティストック・ディレクターとともに鋭意準備を進めてまいりましたが、「OUR MAGIC HOUR ー世界はどこまで知ることができるか?ー」という展覧会タイトルのもと、国内外の60余名のアーティストの参加を予定しています。

今回は、横浜美術館の特徴を生かし、横浜美術館コレクションに収蔵されている作品とアーティストのコラボレーションや異世代をつなげる展示も試みる予定です。また、BankART1929、黄金町エリアマネジメントセンターなど、横浜市の創造都市の取組にかかわるNPO、教育機関、市民等による多様な組織と連携することも、横浜トリエンナーレの特徴といえます。

そして今回から「みる、そだてる、つなげる」という3つの言葉を掲げ、横浜トリエンナーレが現代美術にかかわる多様な機会を創出する契機となることを目指します。

- 1、美術作品の鑑賞を通して見るという体験を深める機会となること
- 2、作家はいうまでもなく美術愛好家も育てる機会となること
- 3、まだ歴史化されていない現代美術の作品を未来へつなげる機会となること
- 4、現代美術にかかわるネットワークを構築する機会となること

横浜トリエンナーレが、現代美術の創造活動を支えながらその存在意義を伝え、横浜から文化力を国内外へ発信する貴重な場として浸透し、魅力ある文化活動の拠点として、息の長い活動を未来へつなげることができるよう邁進いたしますので、皆さまのご理解、ご協力をお願いいたします。

ヨコハマトリエンナーレ2011  
総合ディレクター  
逢坂 恵理子



撮影：鈴木理策

ヨコハマトリエンナーレ2011総合ディレクター、横浜美術館館長  
国際交流基金、ICA名古屋で、多くの現代美術の国際展にかかわり、水戸芸術館美術センター（1994-2006年、1994年より主任学芸員、1997年より芸術監督）、森美術館アーティストック・ディレクター（2007-2009年）を経て、2009年4月より現職。第49回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館コミッショナー（2001年）など、豊富な経験を持つ。学習院大学文学部哲学科卒業、芸術学専攻。

### ヨコハマトリエンナーレ2011 OUR MAGIC HOUR—世界はどこまで知ることができるか？—

#### ■ディレクター

総合ディレクター：逢坂恵理子

アーティスティック・ディレクター：三木あき子

#### ■会期

2011年8月6日（土）～11月6日（日）

（※休館日：8月18日、9月1日・15日・29日、10月13日・27日）

#### ■会場

横浜美術館、日本郵船海岸通倉庫（BankART Studio NYK）、その他周辺地域

#### ■開館時間

10:00～18:00/金曜日は10:00～20:00

#### ■主催

横浜市、NHK、朝日新聞社、横浜トリエンナーレ組織委員会

#### ■共催

公益財団法人横浜市芸術文化振興財団

#### ■協賛

森ビル株式会社、日産自動車株式会社、アサヒビール株式会社、JVC・ケンウッド・ホールディングス株式会社  
株式会社大林組、川本工業株式会社、株式会社崎陽軒、株式会社サカタのタネ、横浜信用金庫、馬淵建設株式会社

#### ■助成

財団法人アサヒビール芸術文化財団、公益財団法人野村財団

#### ■寄附

横浜信用金庫

#### ■前売券発売予定

2011年5月

#### ■入場料

当日券：一般1800円、大学・専門学校生1200円、高校生700円

前売券：一般1200円、大学・専門学校生800円、高校生300円

団体券：一般1300円、大学・専門学校生900円、高校生400円

フリーパス：一般3000円、大学・専門学校生2000円、高校生1000円

中学生以下、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

### 横浜美術館

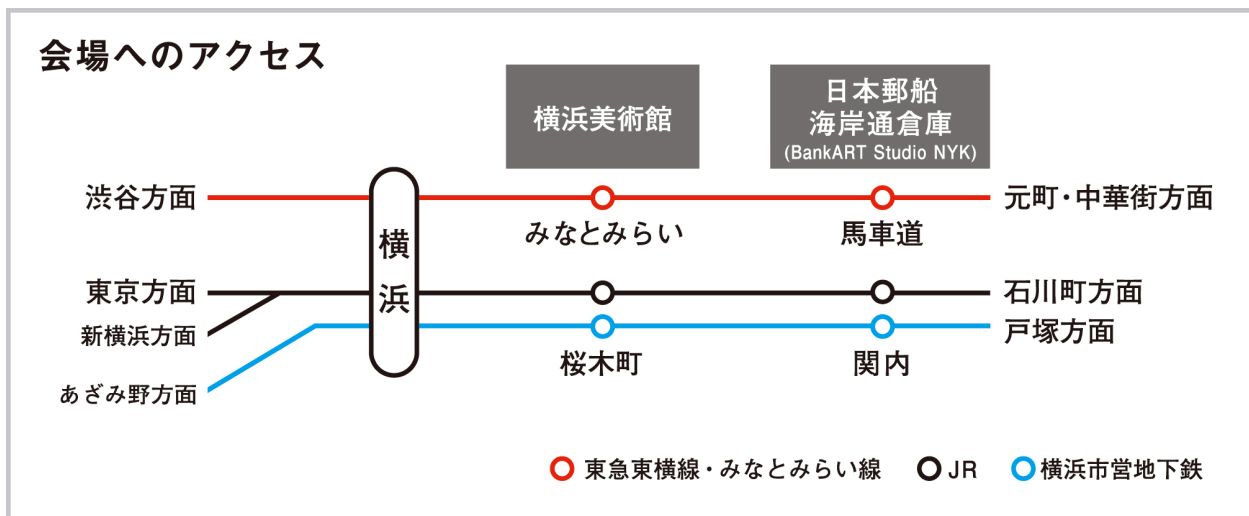
横浜美術館は、1989年3月に、横浜博覧会の施設として開設し、同年11月3日に開館。19世紀後半以降の美術作品を中心に、ダリ、マグリット、ミロ、ピカソ、セザンヌ等の作家の作品、幕末・明治以来の横浜にゆかりの深い作家の作品等幅広く収集。写真伝来の地のひとつである横浜にある美術館として、写真コレクションも充実。建物は延床面積26,829㎡、丹下健三・都市・建築設計研究所の設計。ヨコハマトリエンナーレ2011では企画展、コレクション展展示室のほかグランド・ギャラリーなど、館内全域を展示会場として利用予定。



撮影：笠木靖之

### 日本郵船海岸通倉庫 (BankART Studio NYK)

馬車道駅から徒歩4分の日本郵船海岸通倉庫は、1952年に物流倉庫としてスタートし、日本郵船歴史資料館を経て2005年より、NPO法人BankART 1929の運営するBankART Studio NYKとして、展覧会・パフォーマンスイベント・カフェ・ショップ・スタジオ・スクール等の会場として活用。2008年に設計事務所「みかんぐみ」による本格的改修設計を経て現在に至る。ヨコハマトリエンナーレ2011では3階建鉄筋コンクリート造の建物の1階の一部と2～3階の床面積約2,500㎡を利用予定。



## OUR MAGIC HOUR —世界はどこまで知ることができるか?—

21世紀初頭の現在、科学技術は高度に発達し、インターネット等のメディアによって世界は隅々まで明らかにされたかに思えます。しかし、我々の身の回りには、まだまだ科学や理性では説明できない世界の不思議が多く存在するとともに、科学技術の発展によって我々の時空間概念も大きく変容しつつあります。

4回目となる横浜トリエンナーレでは、「OUR MAGIC HOUR—世界はどこまで知ることができるか?—」というタイトルのもと、世界や日常の不思議、魔法のような力、さらには超自然現象や神話、伝説、アニミズム等に言及した作品に注目します。この方向性は、決して科学の限界を問うものでも、また神秘主義を讃えたり、単にアートの娯楽性のみを追求するものでもありません。それよりも、こうした科学や理性では解き明かせない領域に改めて眼を向けることで、これまで周辺と捉えられていた、あるいは忘れ去られていた価値観や、人と自然の関係について考えるとともに、より柔軟で開かれた世界との関わり方や、物事・歴史の異なる見方を示唆しようとするものです。

今回、横浜美術館と日本郵船海岸通倉庫（BankART Studio NYK）という、ふたつの主会場の屋内外に、60余名の現代アーティストの作品を中心に、横浜美術館の所蔵品も一部加えて展示します。サイトスペシフィックなインスタレーションや映像メディアを駆使した作品から、近代絵画やコプト織のような歴史的な作品まで、制作年代も素材も大きく異なる多種多様な作品群で構成される予定です。

このように、本展では、展覧会の各所に、さまざまな意外な「遭遇・出会い」があることが特徴的といえます。単に観客参加型の作品を含むということではなく、各種テーマや枠組みを通して、時代や世代、文化背景、ジャンルの異なる作品が対峙・対話、関係性をもつことで、新たな解釈や創造が生まれ、分類やカテゴリーにとらわれない自由な鑑賞の旅を促します。また、今回から横浜美術館も主会場のひとつとなったことを受けて、アーティストたちと協働で美術館の所蔵品や美術館という場所に新たな視点を投げかけもします。

「謎や矛盾を柔軟に受け止め、視点を変えれば、魔法のように、世界は開けるかも知れない」—ヨコハマトリエンナーレ2011は、先行きの見えない混沌の時代といわれる現在、そうした思いのもと、既成の枠組みや観念に縛られず、子供のように純粋な好奇心と柔軟性、想像力をもって、我々の住む環境や時代、人間存在について改めて考えようとするものです。

\* 「OUR MAGIC HOUR」は、ウーゴ・ロンディノーネの作品タイトルでもあり、本作は横浜美術館屋外に設置予定です。

ヨコハマトリエンナーレ2011  
アーティストック・ディレクター  
三木 あき子

ヨコハマトリエンナーレ2011 アーティストック・ディレクター  
インディペンデント・キュレーター、電通アートプロジェクト共同ディレクターなどを経て2000年にパレ・ド・トーキョー（パリ）のチーフ・キュレーターに就任。現在パリを拠点に活動。パービカンアートギャラリー（ロンドン）や韓国国立現代美術館等での企画、台北ビエンナーレ等の国際展での経験も多数。  
米国ワシントン大学美術史科卒業、パリ第四ソルボンヌ大学美術史修士課程修了。



リナ・バネルジー/Rina BANERJEE

1963年、コルカタ(インド)生まれ。ニューヨーク在住。

リナ・バネルジーは、インドに生まれ、幼少の頃にイギリス、そしてアメリカに渡り、以来ニューヨークを拠点に、様々な表現手段を使いながら活動している。こうした経歴は、バネルジーの表現活動に大きな影響を与え、常にアジアと西洋を意識させる素材を同時に使い、異なる文化の融合を生み出す突然変異的な美を創造する。植民地時代のテキストを彷彿する品々、建築、ファッションなどをアレンジしながら作品に取り込んでいる。常に新奇なモノに対する一方向的なエキゾシズムの眼差しに批判的な態度を表明する。



《I'll get you my pretty!》 2009

1

マッシモ・バルトリーニ/Massimo BARTOLINI

1962年、チェーチナ(イタリア)生まれ。同在住。

表現領域は広く、彫刻、パフォーマンスから写真にまで及んでいる。その作品は、モノとしての完成を目指すのではなく、ある特定の環境を作り出すことにある。2008年に最初に発表され、今回の出品作でもある《Organi》も、オルガンそのものを作り出しながらも、あたかも、教会を想起させる空間を作り出すと同時に、一見したところ工事現場の足場のように組まれた管が、まるで蜘蛛の巣が張られたような印象を与えている。



《Organi》 2008

2

ジェイムス・リー・バイヤース/James Lee BYARS

1932年、デトロイト(アメリカ)生まれ。1997年没。

コンセプチュアル・アート、あるいはミニマル・アートを代表するアーティスト。モノの物質的性質を奪うことで、存在の本質的な構造を明らかにしようとする。とりわけ、自身の身体、あるいは既製のオブジェを素材として、パフォーマンス、インスタレーションを連動させた作品を制作している。また、死を重要なテーマとし、光のメタファーである金を多用することで、自らの死が光と融合することを意図した。



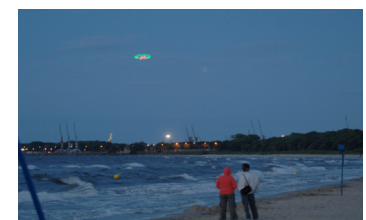
《Five Points Make a Man》

3

ピーター・コフィン/Peter COFFIN

1974年、カリフォルニア(アメリカ)生まれ。ニューヨーク在住。

ピーター・コffinは、これまで美術史上の作品を巡って権威づけられた認識や解釈にたいして疑問を示すことで、あらたな世界の理解を作品にしてきた。彫刻インスタレーション、写真、ビデオなど、その表現メディアは多岐にわたる。不安定な社会情勢や人々の見通せない将来への不安の表象として、また、共同体が共有するアイコンとしてUFOを捉えた作品等がある。



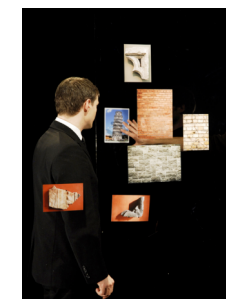
《Untitled (UFO)》 2008-現在

4

オレリアン・フロマン/Aurélien FROMENT

1976年、アンジェー(フランス)生まれ。ダブリン在住。

映像や写真から書籍に至るまで幅広い手法を用い、ドキュメンタリーと虚構の間で物語性に富んだ創作を行う。今回紹介する《Théâtre de Poche》(2007)では、暗闇から現れたマジシャンの手から、ポピュラーな映画のワンシーンや様々な時代の建築・美術品イメージが次々に繰り出され、観る者を魔術的で不思議な世界へと誘う。



《Théâtre de Poche》 2007

5

## 参加作家



6

ライアン・ガンダー/Ryan GANDER

1976年、チェスター(イギリス)生まれ。ロンドン在住。

ライアン・ガンダーは、多様なパフォーマンス、インスタレーションといった多岐にわたる作品展開で知られるコンセプチュアル・アーティスト。ストリートカルチャーとの関わりも深く、作品の多くは、情報社会の中で失われがちな「考える」という行為について、疑問を投げかけている。

《A sheet of paper on which I was about to draw, as it slipped from my table and fell to the floor》2008



7

ヘンリック・ホーカンソン/Henrik HÅKANSSON

1968年、ヘルシンボリ(スウェーデン)生まれ。フォルケンベルグ、ベルリン在住。

ヘンリック・ホーカンソンは、蛙や鳥の生態を記録したり、植物など自然の一部をそのまま展示空間に移行するインスタレーション作品で知られる。世界が直面する顕著で深刻な環境問題に言及したり、人間と自然環境の関わりに問いを投げかける、彼の一連の創作活動は、自然環境を人間の視点からのみ理解するのではなく、他の生物の視点や能力も通して、世界を捉えようとする思いにもとづいている。



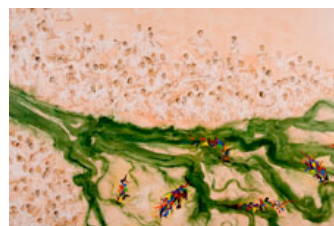
《Fallen Forest》2006

8

N.S. ハルシャ/N.S. HARSHA

1969年、マイソール(インド)生まれ。同在住。

インドの細密画や民俗画の形式による人物群像図にもとづきながら、インドはもとより世界のグローバル化にともなう様々な社会的、政治的な課題や環境問題をあらわにする。近年は絵画にとどまらず、美術館やギャラリーの他、既存の建物などでの大規模なインスタレーションや、地域住民とともに行うワークショップなど、サイトスペシフィックな作品を発表している。



《Absurd Blossom》2009

9

池田 学/IKEDA Manabu

1973年、佐賀県生まれ。東京都在住。

池田学は、あらゆる事象の細部にこだわり、昆虫、獣、あるいは木霊といった神話的な対象を緻密に細密描写する。それらは、博物誌のようにも見えるが、同時に、身近な私生活の出来事や、日本の原風景、あるいはインターネットなどから入手したイメージを巧みに引用、混在させている。不可視の全体像に挑むような細部へのこだわりが、池田学の絵画の最大の特徴といえる。



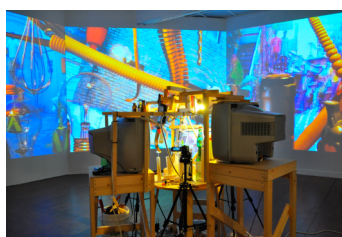
《予兆》2008

10

泉 太郎/IZUMI Taro

1976年、奈良県生まれ。東京都在住。

泉太郎は、美術大学で油絵を学びながら、身近な素材とビデオカメラを使って映像作品を撮りはじめた。触れることのできない景色、情報、音といった身の回りの現象や、現場で刻々と変化するインスタレーションそのものを、絶えず映像化するなど、現実と仮想の世界との反復による、展示空間そのものの作品化などで知られる。



《スラングとしての魚の骨》2010



## 参加作家



11

シガリット・ランダウ/Sigalit LANDAU

1969年、テルアビブ(イスラエル)生まれ。同在住。

シガリット・ランダウは、一貫して作品の主題を自国イスラエルに求めてきた。いくつかのビデオ作品では、自らの肉体を使い、身体的なパフォーマンスを組み入れている。《DeadSee》(2005)では、500個のスイカと自らの体を死海に浮かべて、直径6メートルの円を形づくり、作品にした。イスラエルの歴史的、民族的記憶と、同時代の人々の記憶を絡ませながら、人間存在について問いかけている。



《DeadSee》2005

12

クリスチャン・マークレー/Christian MARCLAY

1955年、カリフォルニア(アメリカ)生まれ。ロンドン、ニューヨーク在住。

クリスチャン・マークレーは、1970年代の後半から、ターンテーブルを使ったパフォーマンス活動をしてきた。80年代半ばからは「レコード・プレーヤー」と称して、ターンテーブルを使った即興演奏のパイオニアとして名を馳せた。今回出品される映像作品《The Clock》(2010)は、1分ごとに時刻を示すシーンを古今東西の映画作品から抽出し編集した、1日24時間の大作。



《The Clock》2010

13

森 靖/MORI Osamu

1983年、愛知県生まれ。茨城県在住。

森靖の作品は、古典と現代、アートにおけるハイエンドローなど、異なる価値の融合をテーマとした彫刻作品である。それは、半人半獣(ケンタウロス)の神話的世界も想起させ、複合的な主題を提示している。作品制作では、事前のドローイングなどの準備を行わず、即興的に開始する。若いながらも熟練した技術が、その制作行為を支えている。



《絶対領域-龍》2008

14

リヴァーネ・ノイエンシュワンダー/Rivane NEUENSCHWANDER

1967年、ベロ・オリゾンテ(ブラジル)生まれ。同在住。

リヴァーネ・ノイエンシュワンダーは、映像、写真、インスタレーションといった様々な表現手段を用いるだけでなく、鑑賞者が主体的に作品制作に参加・鑑賞することを重視する。視点を変えるだけで世界が違って見える、といった経験を通して世界を理解しようとする。日常のみならず、自然界における事象を用いた詩的で、哲学的な見方を我々に示す。



《O inquilino/ The Tenant》2010

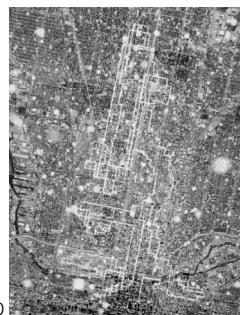
15

ジュン・グエン=ハツシバ/Jun NGUYEN-HATSUSHIBA

1968年、東京都生まれ。ホーチミン在住。

ジュン・グエン=ハツシバは、日本人の母と、ベトナム人の父との間に生まれた。幼少時代を日本で過ごし、その後アメリカで美術教育を受け、現在はベトナム・ホーチミンを拠点に制作活動を行っている。今回のランニングプロジェクトでは、作家が実際に走ることによって、GPSで描かれる「地球のドローイング」と、ビデオ作品などによって構成される。走るコースは、その土地の持つ記憶、あるいは作家本人の個人的な記憶にもとづいて決定される。

《Breathing is Free: 12,756.3 - Chicago Microscope (A Self-portrait),88.5km》2010



## 参加作家



16

カールステン・ニコライ／Carsten NICOLAI

1965年、カール・マルクス・シュタット(ドイツ)生まれ。ベルリン、ケムニッツ在住。

カールステン・ニコライは、主にアートと科学の領域を横断的に取り入れたマルチメディアな作品を制作している。ノト (noto)、アルバ・ノト (alva noto) という別名でも活動を展開し、実験的エレクトロニック・ミュージシャン、アーティストのひとりである。出品作《autoR》は、auto=自己とRを組み合わせて名づけられ、鑑賞者が幾何学模様のパーツを自由に組み合わせて建物の外壁をデザインする参加型の作品。



《autoR》 2010

17

スーザン・ノリー／Susan NORRIE

1953年、シドニー(オーストラリア)生まれ。同在住。

絵画から創作のキャリアをスタートさせたスーザン・ノリーは、人間と環境をテーマに近年は映像作品を制作。今回出品する《TRANSIT》(2011)は、軍事目的ではなく、平和利用としての宇宙開発を進展させてきた日本の宇宙産業と、自然の対比に着目した新作である。種子島でのロケット発射と桜島の噴火の映像を組み合わせた作品は、宇宙をとらえようとする人間の英知と、人間の英知を持ってしても予知できない自然の超越した力を提示する。



《TRANSIT》 2011

18

ウィルフレド・プリエト／Wilfredo PRIETO

1978年、サンクティ・スピリタス(キューバ)生まれ。ハバナ在住。

ウィルフレド・プリエトは、日常的な物や事柄を素材に用い、静的でありながら挑発的に、そして皮肉とユーモアを交えながら、観る者に様々な想念を喚起させる。無数のクリスタルダイヤの塊の中に、たった一つ本物のダイヤを潜ませた今回の出品予定作《One》(2008)は、目に見えない「真正」の価値を求め続ける人間の行為を示唆する。



《One》 2008

19

スッシリー・プイオック／Sudsiri PUI-OCK

1976年、チェンマイ(タイ)生まれ。同在住。

自身が身をおく場所に関する記憶や他者と自分、自然と人間といったテーマを映像、写真、絵画など、多様なメディアで表現する。出品予定の《Pumpkin Project》は、畑で育てたかぼちゃを枝についたまま、タイの伝統的なベジタブル・カービングの手法で花の形に彫り、そのまま展示するプロジェクト。鑑賞者はオブジェとして美しく生まれかわったかぼちゃが、時間とともに腐敗し、枯れていく様を目撃することとなる。



《Pumpkin Project》 2008

20

ウーゴ・ロンディノーネ／Ugo RONDINONE

1963年、ブルンネン(スイス)生まれ。ニューヨーク、チューリッヒ在住。

同心円状の絵画や、毛を逆立てたような木の彫刻といった多種多様な作品で構成されるウーゴ・ロンディノーネの世界は、内面と外面、秩序と無秩序、定形と無定形の間を交差しつつ、詩的で幻想的なムードのランドスケープを映し出す。近年の代表作である、12星座にもとづいた巨大なマスクのような彫刻群は、アミニズム的なシンボリズムを想起させ、時を超えて原始的な時間へと我々を誘う。



《moonrise.east, march》 2005

## 参加作家



21

佐藤 允 / SATO Ataru

1986年、千葉県生まれ。京都府在住。

佐藤允はシャープペンシルで濃密なドローイングを描き、その断片をコラージュすることで作品にする。衝動のおもむくまま加筆と修正が執拗に繰り返されるドローイングは、両性具有的なイメージを想起させる。また、完成されたかに見えるイメージを紙面から展示壁へと増殖させることで、平面から空間全体にエネルギーが満たされる。

本展、最年少参加作家。



《生命力》2008-2009

22

杉本 博司 / SUGIMOTO Hiroshi

1948年、東京都生まれ。東京、ニューヨーク在住。

1970年代後半から、写真シリーズ《ジオラマ》や《劇場》の制作を開始。以後、《海景》など、時間を封じ込めた静謐なモノクロ写真を発表し、国際的にも高い評価を得る。杉本博司の関心は、人文科学、自然科学の広い範囲に及び、古美術や建築にも造詣が深い。古材、名物裂、仏像、隕石や化石など、悠久の時間の中で自然と人間の営為が作り上げた造形物を収集し、独特の視点と美意識で歴史を再構築する作品も発表している。



《放電場216》2010

23

孫遜 (スン・シュン) / SUN Xun

1980年、遼寧省(中国)生まれ。北京在住。

孫遜(スン・シュン)は、最初版画を学び、のちに、映像と絵画の要素を取り入れた作品を制作するために、アニメーションの手法を選んだ。彼は、改革開放以降の急速な経済発展の中、変容する社会とともに成長した世代に属し、そのドラマチックな変化の中で、歴史がいかに醸成されていくか、といったテーマを、古今東西の様々な事象を寓意と用いながら作品に結実する。



《21克》2010

24

田名網 敬一 / TANAAMI Keiichi

1936年、東京都生まれ。同在住。

田名網敬一は、60年代よりグラフィック・デザイナー、イラストレーターそしてアーティストとして、幅広い創作活動を行う。日本におけるポップアートの草分け的存在であるのみならず、アートとデザインの問題に早くから挑戦を続けてきた先駆者でもある。自身の記憶や夢に取材した極彩色のサイケデリックなアニメーション、版画やペインティングを数多く生み出した。今回は、70年代に制作された前衛的な手法によるアニメーションを出品。



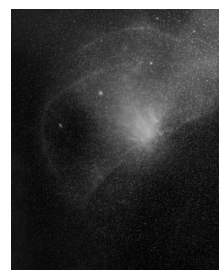
《優しい金曜日》1975

25

田口 和奈 / TAGUCHI Kazuna

1979年、東京都生まれ。同在住。

田口和奈は、新聞や雑誌に掲載された人物写真、自分で撮影した自然の景色などから採集した断片をモニタージュシ、架空のイメージを作る。さらにそれをモノクロームの油彩で精巧に描き、撮影、プリントするという手法により、写真と絵画の境界を軽やかに越境する。多面的なプロセスを丁寧に積み重ねることで、現実と虚構が複雑に織り交ぜられた不可思議な世界へと我々を誘い込む。

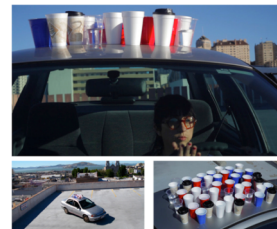


《失ったものを修復する #2》2009

田中 功起/TANAKA Koki

1975年、栃木県生まれ。ロサンゼルス、東京都在住。

田中功起の映像や映像インスタレーション作品は、日常の生活に見いだせる素材を使いながら、世界の構造を示そうとする。何がはじまりで、何が終わりか、という禅問答にも似た問いかけを繰り返しつつ、入口も出口もない世界の有り様を示そうとする。



《cups on a car》 2010

アピチャップン・ウィーラセタクン/Apichatpong WEERASETHAKUL

1970年、バンコク(タイ)生まれ。タイ在住。

アピチャップン・ウィーラセタクンは、2010年映画「ブンミおじさんの森」で、タイの映画監督として初めてカンヌ映画祭にてパルム・ドールを受賞。近年の映像インスタレーションの代表作である《PRIMITIVE》(2009)は、60年代から80年代にかけて、不条理で悲惨な政治闘争に巻き込まれたタイの農村の失われた記憶を再生しようとした作品。制度と個人の間で、生成され、同時に消滅させられてきた歴史、記憶、口承といった事柄に常に関心を示している。



《Morakot(Emerald)》 2007

八木 良太/YAGI Lyota

1980年、愛媛県生まれ。京都府在住。

プレーヤーにかけると溶け出し、やがて消えてしまう氷のレコード、家電製品のリモコンの赤外線電子音化する装置など、八木良太は身近な素材や装置をその本来の用途から引き離し、変換し作品にするコンセプチュアル・アーティスト。消えゆく音や事象そのものを抽出し提示することで、「そこに存在しながら意識されないもの/識別不可能なもの」に形をあたえ、見慣れた風景を、より広がりのある新たな世界へと変貌させる。



《Light of Music》 2006

尹秀珍 (イン・シウジェン) /YIN Xiuzhen

1963年、北京(中国)生まれ。同在住。

中国の持つ、政治的、社会的矛盾と多民族国家の有り様を、古着といった日常的な素材を使いインスタレーションとして表象化する。近年は、急速な経済発展によって変化する自国の状況と、グローバル化する世界を見据えるような静的で、思索的作品の制作で知られる。



《one sentence》 2011

横尾 忠則/YOKOO Tadanori

1936年、兵庫県生まれ。東京都在住。

横尾忠則は、グラフィック・デザイナーとして制作活動をはじめたが、絵画制作をその中心に置いてきた。近年は、特に故郷・西脇市で幼少時に通った模型店付近のY字路(三叉路)を集中して描くシリーズに精力的に取り組む。今回は、その主題は踏襲するものの、漆黒の闇を、自らの出生の記憶、黄泉の国への通過点、あるいは戦時下の闇の記憶などと結びつけ、自伝的な総括とも言える新作などを発表する予定。



《黒いY字路3》 2011

## 参加作家画像 クレジット



1	Rina BANERJEE 《I'll get you my pretty!》 2009 Courtesy of the artist and Haunch of Venison, London
2	Massimo BARTOLINI 《Organi》 2008 ガレリア・マッシモ・デ・カルロ(ミラノ、イタリア)での展示風景 Courtesy: Fundación Helga de Alvear, Madrid - Cáceres, Spain
3	James Lee BYARS 《Five Points Make a Man》 Courtesy Michael Werner Gallery, Berlin, Cologne & New York Photo: Thomas Müller
4	Peter COFFIN 《Untitled (UFO)》 2008-現在 ©Peter Coffin 2011
5	Aurélien FROMENT 《Théâtre de Poche》 2007 Courtesy of the artist and Motive Gallery, Amsterdam
6	Ryan GANDER 《A sheet of paper on which I was about to draw, as it slipped from my table and fell to the floor》 2008 Photo by Jerry Hardman-Jones ©Ryan Gander Courtesy of TARO NASU and Annet Gelink Gallery
7	Henrik HÅKANSSON 《Fallen Forest》 2006 バレ・ド・トーキョー(パリ)での展示風景 Courtesy Galleria Franco Noero, Turin
8	N.S. HARSHA 《Absurd Blossom》 2009
9	IKEDA Manabu 《予兆》 2008 ※参考図版
10	IZUMI Taro 《スラングとしての魚の骨》 2010 メディア・シティ・ソウル(ソウル、韓国)での展示風景 ※参考図版
11	Sigalit LANDAU 《DeadSee》 2005 Courtesy the artist and kamel mennour, Paris
12	Christian MARCLAY 《The Clock》 2010 ©Christian Marclay, Courtesy White Cube
13	MORI Osamu 《絶対領域一龍》 2008 ©Osamu MORI, Courtesy of YAMAMOTO GENDAI
14	Rivane NEUENSCHWANDER 《O inquilino/ The Tenant》 2010
15	Jun NGUYEN-HATSUSHIBA 《Breathing is Free: 12,756.3 - Chicago Microscope (A Self-portrait), 88.5km》 2010
16	Carsten NICOLAI 《autoR》 2010 Photo: René Zieger ©Carsten Nicolai, VG Bild-Kunst, Bonn 2010 Courtesy Galerie EIGEN + ART, Leipzig/Berlin and The Pace Gallery
17	Susan NORRIE 《TRANSIT》 2011 ©Susan NORRIE 2011 cinematographer: Rodo Izumiyama
18	Wilfredo PRIETO 《One》 2008 リッソンギャラリー(ロンドン)での展示風景 Photo: Ken Adlardp Courtesy the artist and Nogueras Blanchard, Barcelona
19	Sudsiri PUI-OCK 《Pumpkin Project》 2008 Photo: Chakkrit Chinnok
20	Ugo RONDINONE 《moonrise.east, march》 2005 Photo: Ellen Page Photography, New York Courtesy Galerie Eva Presenhuber, Zürich
21	SATO Ataru 《生命力》 2008-2009 Collection: Ko Wakabayashi Photo: Yasushi Ichikawa Courtesy of Gallery Koyanagi
22	SUGIMOTO Hiroshi 《放電場216》 2010 ©Hiroshi Sugimoto/Courtesy of Gallery Koyanagi
23	SUN Xun 《21克》 2010
24	TANAAMI Keiichi 《優しい金曜日》 1975
25	TAGUCHI Kazuna 《失ったものを修復する #2》 2009 Copyright the artist, Courtesy ShugoArts
26	TANAKA Koki 《cups on a car》 2010
27	YAGI Lyota 《Light of Music》 2006
28	Apichatpong WEERASETHAKUL 《Morakot(Emerald)》 2007 Art Unlimited, Art 39 Basel (2008)での展示風景 ©Apichatpong Weerasethakul Courtesy of SCAI THE BATHHOUSE
29	YIN Xiuzhen 《one sentence》 2011 Photo: Song Dong
30	YOKOO Tadanori 《黒いY字路3》 2011 撮影: 上野則宏

**展覧会に関するお問い合わせ**

横浜トリエンナーレ組織委員会事務局  
(横浜美術館内)  
担当：藤井  
TEL：045-663-7232  
FAX：045-681-7606  
E-MAIL：press@yokohamatriennale.jp

**広報に関するお問い合わせ**

ヨコハマトリエンナーレ2011 広報事務局  
(ナンジョウアンドアソシエイツ 内)  
担当：西山、柴田  
TEL：03-6408-5559  
FAX：03-6408-5523  
E-MAIL：yt2011@nanjo.com

**市政に関するお問い合わせ**

横浜市APEC・創造都市事業本部創造都市推進課  
(横浜市役所内)  
担当：山岸、鵜田  
TEL：045-671-2278  
FAX：045-663-1928  
E-MAIL：ts-tri@city.yokohama.jp

横浜トリエンナーレ組織委員会事務局  
〒220-0012 横浜市西区みなとみらい3-4-1 横浜美術館内  
TEL：045-663-7232  
FAX：045-681-7606  
E-MAIL：info@yokohamatriennale.jp